

幼小接続資料集成

幼児教育資料アーカイブ3

幼稚園・保育所から小学校へ……

子どもの成長に合わせた、なめらかな教育の「接続」とは？

戦後から 2010 年代にいたるまで、さまざまに試みられた幼児教育と小学校教育の連携と実践の記録を、「幼小接続」という視点から本格的に集成する、はじめての試み！第 3 回配本には IFEL によるまぼろしの雑誌『幼年教育』、そして羽仁説子らの重要論考も採録！

本集成は、全国各地で試みられている幼小接続への取り組みから、お茶の水女子大学、神戸大学などの付属学校園、また私立学園における実践記録、そのなかでも現代における「幼小接続」という課題に焦点を絞った資料を集成、復刻した。各校における報告はさまざまな時期に及ぶため、収録した資料は終戦直後から 2010 年代までと幅広いものとなっている。さらに、GHQ/SCAP によって進められた IFEL（教育指導者講習）によるまぼろしの雑誌『幼年教育』、坂本彦太郎、羽仁説子らの構想を伝える論考を収録する。ここに収められた記録、報告書をひも解くことは、「幼小接続」の連携・強化を進め、そのスムーズな移行をすすめてゆくために不可欠な作業となるだろう。

—— 不二出版編集部

編集・解説

太田 素子（和光大学名誉教授）
小玉 亮子（お茶の水女子大学教授）
福元 真由美（青山学院大学教授）
浅井 幸子（東京大学准教授）
大西 公恵（和光大学准教授）

推 薦

汐見 稔幸（日本保育学会会長、臨床育児・保育研究会代表）
無藤 隆（白梅学園大学名誉教授）

各巻構成

第 1 巻 お茶の水女子大学
第 2 巻 奈良女子大学
第 3 巻 神戸大学
第 4 巻 東京学芸大学
第 5 巻 成城学園・
玉川学園・
和光学園
第 6・7 巻 幼年教育 1・2
別冊・解説

全 7 巻・別冊 1
全 3 回配本

幼小接続資料集成

幼児教育資料アーカイブ3

●編集・解説 ◎ 太田 素子（和光大学名誉教授）・小玉 亮子（お茶の水女子大学教授）
福元 真由美（青山学院大学教授）・浅井 幸子（東京大学准教授）
大西 公恵（和光大学准教授）

●推 薦 ◎ 汐見 稔幸（日本保育学会会長、臨床育児・保育研究会代表）・無藤 隆（白梅学園大学名誉教授）

●揃 定 価 ◎ 162,800 円（揃本体 148,000 円＋税 10%）（全 7 巻揃）

●体 裁 ◎ 全 7 巻／2 面付／A 4 判（第 6 巻・B 5 判／第 7 巻・A 5 判）／上製 布クロス装／計約 4800 頁

●構 成 第 1 巻 お茶の水女子大学 第 2 巻 奈良女子大学 第 3 巻 神戸大学 第 4 巻 東京学芸大学
第 5 巻 成城学園・玉川学園・和光学園 第 6・7 巻 幼年教育 1・2
別冊・解説 ＊別冊のみ分売可：本体 3,000 円＋税 ISBN 978-4-8350-8428-2

●刊行予定

	配 本	定 価	ISBN-No.	刊行予定
第 1 回配本	全 2 巻 第 3・4 巻	揃定価 48,400 円（揃本体 44,000 円＋税）	978-4-8350-8417-6	2021 年 4 月 刊 行
第 2 回配本	全 3 巻 第 1・2・5 巻	揃定価 72,600 円（揃本体 66,000 円＋税）	978-4-8350-8420-6	2021 年 9 月 刊 行
第 3 回配本	全 2 巻 第 6・7 巻・別冊	揃定価 41,800 円（揃本体 38,000 円＋税）	978-4-8350-8424-4	2022 年 1 月刊行予定

お薦め先● 幼児教育、保育、初等教育、カリキュラム、教育内容 等の研究者、大学図書館・専門図書館等



好評
刊行中！

幼児教育資料アーカイブ2

戦前期愛育会関係資料集成

解 説—— 湯川嘉津美 全 11 巻
資料協力—— 恩賜財団母子愛育会・金沢大学附属図書館ほか
推 薦—— 網野武博・穴戸健夫
体 裁—— B 5 判・上製・布クロス装・総約 4500 頁〔2 面付〕
三田谷啓、三木安正、倉橋惣三ら、保育、医療衛生、社会事業、心理学等、各方面の第一人者が横断的に協力し、全国的な母子保護運動を展開した愛育会。
その活動からは戦時下における母性・児童保護の実情がつつさに伝わる。全国各地に普及した調査、啓蒙の足どりを伝える創設来の雑誌『愛育』『愛育新聞』はじめ、現在ではほぼ入手困難となった希少な啓蒙書・パンフレット類を、恩賜財団母子愛育会の協力を得て、一挙に復刻するはじめての試み！

●主な収録内容●

『愛育』1 巻 1 号-10 巻 8 号（1935 年 7 月-44 年 11 月、計 110 号）、『愛育新聞』1 巻 1 号-6 巻 10 号（1938 年 4 月-43 年 10 月）、『愛育のこころ』（1940 年）、『愛育叢書』全 6 輯（1936-39 年）、『こども愛育展覧会記念帖』（1936 年）、『戦没者遺族保育所保母養成講習会記念帖 いざゆかんふたばの護りに』（1940 年）、『愛育村の組織と事業』（1939 年）

揃定価— 揃定価 242,000 円（揃本体 220,000 円＋税 10%）

第 1 回配本 第 8・9 巻（全 2 巻）	定価 44,000 円	978-4-8350-8356-8	2020 年 5 月刊行
第 2 回配本 第 10・11 巻（全 2 巻）	定価 44,000 円	978-4-8350-8359-9	2020 年 7 月刊行
第 3 回配本 第 1-3 巻（全 3 巻）	定価 66,000 円	978-4-8350-8362-9	2020 年 12 月刊行
第 4 回配本 第 4-7 巻（全 4 巻）	定価 88,000 円	978-4-8350-8366-7	2021 年 2 月刊行

日本におけるカリキュラム・マネジメントの淵源を大正期に探る！

大正新教育 学級・学校経営重要文献選

編集・解説—— 橋本美保・遠座知恵

推 薦—— 天笠茂・佐藤学

揃定価—— 198,000 円（揃本体価 180,000 円＋税）

体 裁—— A 5 判・上製・布クロス装・総約 4,000 頁〔各巻約 400 頁〕

カリキュラム・マネジメントをどのように考えるか？当時の教育者、実践家たちの理想と実践を理解するために欠かせない、大正新教育期における学級経営、学校経営の重要な文献・論考を精選する、はじめての文献・論文選集。澤正『学級経営』はもちろん、及川平治や西山哲治など明治期の教育者はじめ、北澤種一、木下竹次、野村芳兵衛、齋藤諸平、赤井米吉などの幅広い論考、約 60 点を収録。——大正新教育の教育実践が、今よみがえる！

全Ⅱ期・全 3 回配本・全 10 巻

完 結 !!

●第Ⅰ期 高等師範学校における学級・学校経営	
第 1 回配本 第 1－3 巻	●定価 59,400 円 (2019 年 7 月刊行) ISBN978-4-8350-8283-7
第 2 回配本 第 4－6 巻	●定価 59,400 円 (2019 年 12 月刊行) ISBN978-4-8350-8287-5
●第Ⅱ期 師範学校付属小学校・公立校・私立校における学級・学校経営	
第 3 回配本 第 7－10 巻	●定価 79,200 円 (2020 年 5 月刊行) ISBN978-4-8350-8291-2

体 裁 ● 全 7 巻／2 面付・A 4 判（第 6 巻・B 5 判／第 7 巻・A 5 判）／
上製／計約 4800 頁・別冊（附・第 3 回配本、分売可：定価 3,300 円（本体 3,000 円＋税 10%））
揃定価 ● 162,800 円（揃本体 148,000 円＋税 10%）（全 7 巻揃）

不二出版

2021.9.

不二出版

〒112-0005
東京都文京区水道2-10-10
振替 東京 003598167004
FAX 03598167004
TEL 03598167004
代 03598167004
替 03598167004

表示価格はすべて税別

推薦します

幼保小の理念を有機的につなぐ

汐見 稔幸

幼小接続あるいは幼保小の接続問題の背後にある本当の問題は、意図的計画的な学校カリキュラムを何歳からつくり上げていくのかということです。現在では、大部分の子どもたちが幼稚園、保育所、こども園に通っているわけですから、幼少期のカリキュラムと学齢期のカリキュラムは、同一方向を向いていることが必要になります。そのためにまず、幼児教育と小学校以降の教育でめざす人間像の大枠が一致していることが必要になります。そうでないと子どもたちに、幼児期と学齢期とでは別の山道を登りなさいというのと似たことが起こります。そのうえで、教育を通じて、子どもたちに具体的にどういった資質・能力を育むか、これも基本が一致していることが必要になります。これは、学校教育のカリキュラムを実質的に幼児期からつくっていくということにつながります。現在のように、大部分の子どもが保育・幼児教育を受けているような時代には、カリキュラムの統合、連携努力が不可欠のはずです。

理屈で考えればそう思えるのですが、幼稚園が義務教育でないことが行政上の責任と管轄の違いにつながって、実際にはこれまで幼保小の教育目標や目指す人間像などを共通化し、そこから教育内容を有機的につなげていく努力は不十分でした。そのため、国は急いで幼保小の接続連携の強化を訴えています

が、実は、大きな流れではありませんが、これまでの歴史のなかで、そうした努力を自覚的に追求してきたところがありました。国立の付属幼稚園と付属小学校、そして幼児教育から大学までの教育を一貫して行っている私立の学校などです。そこには、乳幼児期から責任をもって小学校以降まで育てていくための幼保小の連携や、カリキュラムの接続は実際にどうあるべきかについての具体的な経験、スムーズな連携接続を妨げる要因などの知見が蓄積されています。

戦後初期に、わが国の保育、幼児教育の制度化に多大な貢献をした倉橋惣三氏と坂元彦太郎氏は、戦後の義務教育を3歳からはじめるものにしたかったと、のちに語っています。「私が生きているあいだは無理だろうが」と倉橋氏がいったと坂元氏は回顧されていますが、こうした発言は、幼保と小を一貫させようとする努力が戦前からあったことを、両氏が熟知していたからだと思われます。

本集成は、そうした先人の努力を余すところなく網羅するという意欲的なもので、これから幼保小の接続、連携の強化を考えている園、学校には格好の資料となると思います。

(しおみ・としゆき 日本保育学会会長、
臨床育児・保育研究会代表)

苦心重ねる現場に貴重な資料

無藤 隆

幼児教育（保育）、すなわち幼稚園・保育所・認定こども園と小学校とのあいだの繋がりを、それぞれの時期の特性を大事にしつつもスムーズに移行できるようにしていくことは、幼児教育そして小学校の低学年教育（すなわち小学校教育の素地の形成の時期）の質を高めていく要となる方策であるのです。そして今、そのことを多くの人が認識するようになり、その実践的な試みが全国各地で展開されています。いい換えれば、日本の幼児教育（保育）や小学校以降の学校教育は、各々の段階では比較的質の高い保育・教育を実現しようと頑張っているのだが、その繋がりの部分で前の時期にせっかく育ってきた子どもの力や態度が次の時期にうまく生かされず、無駄に足踏みさせているのではないかと考えるようになったのです。そこで、2017年の関連法令の改定では、幼稚園、保育所、認定こども園、小学校と足並みを揃えて、子どもの資質・能力を育成することを根幹に据えながら、具体的な子どもの育ちの姿を共有することを通して、前の時期の育ちを後の時期に生かして質の高い教育を実現しようとしているのです。

こういう考えは一朝一夕にできたわけではありません。むしろ、机の上の理屈というより、かなり長いあいだの実践現場での試行の努力が実り、少しずつかたちになってきたのです。そ

してさらにその元をたどれば、戦後まもなくの時期から幼児教育と小学校教育とをつなごうという構想があり、その努力が折々になされてきています。そういう営みを受けて、要領・指針が改訂され、そしておそらくさらなる現場での実践的努力を受けて、今後改訂がさらになされると思われます。そのように、幼児教育と小学校教育をつなぐ接続の考えは、上からの主導というより、実践現場での営々とした試みを反映しているものです。そしてその中心を担ってきたのが、全国各地の国立大学の教育学の研究者とその附属学校園の実践者の協働的实践であり、またそこに私学の学校園なども、独自の寄与をしてきています。

この集成により、そうした営みの多くを文書としてあらためて読むことができることは、近年の幼児教育と小学校低学年教育の改革の流れを知るとい歴史的な関心に応えるものですが、それと同時に、今、幼児教育と小学校教育の接続を進めることに苦心を重ねている全国の方々にとって貴重な資料となるものです。この資料を読み込むことで、その開拓的営みをいかに進めるかへのヒントが、多々得られることでしょう。

本集成を貴重な資料として推薦いたします。

(むとう・たかし 白梅学園大学名誉教授)

刊行にあたって

幼小接続をめぐる実践とその可能性をひらく 太田 素子

日本の近代的な幼児教育の制度と実践は、150年近い経験の積み重ねからくる共通理解の深まりの一方で、近年まで先進国の制度にはそぐわない後進性を残してきた。幼稚園と保育所が就学年齢まで並存する制度下で、幼保それぞれがあまりに独自の発展を遂げたため、新しく認定子ども園を設立しても、保育内容の創出までには理論的・実践的課題が数多く残されているのが現状である。

さらにグローバル化やICT技術の革新、地球温暖化や少子高齢化など、変化の激しい時代において、自らの生き方を選択し、新しい世界を生み出すことのできる次世代を育てることが課題とされるいま、乳幼児期の保育・教育と、初等教育の連携・接続に、教育関係者の関心が寄せられている。2018年度施行「幼稚園教育要領」に掲げられた「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」は、幼児教育の戦後史のなかできわめて特別な出来事である。「学校教育体系の一環としての幼児教育」は学校教育法制定以来の理念であり、幼児教育を時代の要求にふさわしく展開するためには、学校教育との差異と関連を見つめなおし、学校教育の基礎に据える取り組みが必要であろう。だがそれが、双方のカリキュラムの順次性や教育目標のレベルで調整されるべきなのかどうか、クリティカルな議論を十分に深めておく必要がある。

国際比較調査で明らかにされたように、日本の幼児教育は子どもの集団的な関わりを保育に活かし、子どもの関心や意欲を励ますことにすぐれていること、幼児期の就園率が幼保で90数パーセントと高く、公的な保育が普及していることなど、貴重な資源をもっている。さらに幼小接続を考えるうえでは、歴史的に重要な資源としての、国立大学の付属幼稚園に注目したい。旧師範学校の附属学校園は、20世紀初めに世界の新教育を精力的に吸収し、幼児期から小学校低学年まで連続した性格の教育を生み出そうと努めた。その貴重な遺産である新教育の系譜から接続問題への研究の手がかりを、あらためてまとめておきたいと考えたのである。

本集成では最初の官立幼稚園を擁するお茶の水女子大学をはじめ、奈良女子大学、神戸大学などの国立大学の附属校園、そして和光学園など私立学園関係の報告書をまとめる。各学校園が幼小接続に関して研究した時期はさまざまだが、多くは1990年代以降のものとなっている。さらに占領下において、その積極的な意義を見出された「幼年教育」の実態を捉えるため、雑誌『幼年教育』と羽仁説子らによる関連論考を収録する。

この集成によって、接続をめぐる実践とその可能性がひらかれ、今後の研究をファシリテートする方々や学生のツールの一つとなることを願っている。

(おおた・もとこ 和光大学名誉教授)



▲成城学園で発刊された『教育改造』（1946年6月創刊）、『近代教育』（1949年12月創刊）の表紙。これらの雑誌には、成城学園の試みの数々を見出すことができる〔第5巻「成城学園・玉川学園・和光学園」抄録〕。

◀上：『成城教育』創刊号（1956年5月）□絵写真より。
下：奈良女子大学附属幼稚園、小学校「教育課程・指導計画」〔第2巻「奈良女子大学」より〕

● 収録予定資料一覧

- 各資料解説は、別冊として第3回配本に附す予定です。
- 収録は1頁2面付による、影印版復刻となります。



第1回配本

第3巻 神戸大学 太田 素子 編		
明石附小プラン（試案）昭和二十三年七月（『研究紀要』4）	兵庫師範学校女子部附属小学校	1948
経験基準表（試案）明石附属プラン（『研究紀要』8、昭和二十五年七月）	神戸大学兵庫師範学校明石附属校園	1950
幼稚園教育課程試案 年少	神戸大学教育学部附属幼稚園	1956
幼稚園教育課程試案 年長		1956
幼稚園及び小学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発（昭和51年度 教育課程の基準改善のための教育研究開発に関する報告書）	神戸大学教育学部附属幼稚園・神戸大学教育学部附属明石小学校	1977
幼・小・中12か年連携研究に根ざした教育課程の提唱（『教育子午線』vol.3）	神戸大学発達科学部附属幼稚園・附属明石小学校・付属明石中学校研究会	1994
幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法等の研究開発（文部科学省研究開発学校 研究開発実施報告書 平成23年度第2年次）	神戸大学附属幼稚園	2012
「幼小接続」から「幼小一体」へ9年間を一体としてとらえた「初等教育要領」の開発をめざして（平成25-28年度文部科学省研究開発学校指定第4年次、『幼稚園研究紀要』37・『小学校研究紀要』4）	神戸大学附属幼稚園・小学校	2016

第4巻 東京学芸大学 福元 真由美 編		
心身の発達に即した、自己教育力の基礎基本の育成・定着を図る教育課程の開発 幼稚園と小学校1年、2年の連携、一貫教育を通して（平成2年度文部省研究開発学校指定1年次、『研究紀要 新竹早カリキュラムの編成と実施』）／（平成4年度文部省研究開発学校指定3年次、『研究紀要 新竹早カリキュラムの編成と実施』）	東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校	1991・93
教育課程作成の手引き（平成5年度、幼稚園・1年用）		1994
学びの場をひらく（平成8年度、『研究紀要』第15集）【抄】		1997
幼小中の新しい連携を目指す基礎的研究 先行研究を踏まえた竹早地区の新しい連携のあり方の考察（平成14年度教育改善推進費 学長裁量経費 報告書、『研究紀要』第41号）【抄】	東京学芸大学附属竹早中学校	2003
主体性を育む幼・小・中連携の教育 幼・小・中の接続期に着目して（平成19年度、『東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校研究紀要』）【抄】	東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校	2008
主体性を育む幼・小・中連携の教育 連携カリキュラムの提案（平成24年度、『東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校研究紀要』）【抄】		2013
竹早地区 連携カリキュラム集録（平成24年度、『幼・小・中公開研究会別冊資料』）		2012

第2回配本

第1巻 お茶の水女子大学 小玉 亮子 編		
幼稚園及び小学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発 幼稚園及び小学校において、幼児・児童の心身発達に対応して、幼稚園及び小学校の連携を図る教育課程の研究開発を行う（昭和61年度、第2次報告書）／（昭和62年度、第3次報告書）	お茶の水女子大学附属小学校	1987・88
幼稚園及び小学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発 関わりあって学ぶ力を育成する教育内容・方法の研究開発 学びの基礎・基本を育む異年齢体験活動（平成13年度、第1年次報告書）／（平成14年度、第2年次報告書）／（平成15年度、第3年次報告書）	お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校	2002・03・04
幼児教育と小学校教育をつなぐ 幼小連携の現状と課題	お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター	2005
幼・小・中12年間の学びの適時性と連続性を考えた連携型一貫カリキュラムの研究開発 協働して学びを生み出す子どもを育てる（平成17年度研究開発実施報告書、第1年次）／（平成18年度研究開発実施報告書、第2年次）【抄】／（平成19年度研究開発実施報告書、第3年次）【抄】	お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校	2006・07・08
附属学校園を活用した新たな学校教育制度設計に係る調査研究 高度専門的研究力を持つ教員養成・現職研修システムの構築と幼小接続期の新学校制度開発（平成22年度成果報告書）／（平成23年度成果報告書）／（平成24年度成果報告書）／（平成25年度成果報告書）／（平成22年～平成27年度、最終成果報告書）【すべて抄録】	お茶の水女子大学学校教育研究部	2011・12・13・14・16

第2巻 奈良女子大学 大西 公恵 編		
事物認識とその表現形成の徹底化を通して独創的で「ねばり強い」思考能力を育成する 幼・小・中等15年間にわたる教育課程の研究開発、第1年次（平成19年11月、『研究紀要』第28集）	奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会	2007
〈モノ〉とじっくりかかわる中で「ねばり強く」思考する力を育てる 幼・小・中等15年間を見通して（平成21年11月、『研究紀要』第29集）		2008
幼小一貫教育において「読解と表現を〈つなぐ〉論理的思考力」を育成する教育課程の研究開発 文部科学省研究開発学校研究開発実施報告書（平成22年3月、平成21年度第1年次）／（平成22年3月、平成22年度第2年次）／（平成22年3月、平成23年度第3年次）	奈良女子大学附属幼稚園、小学校	2010・11・12
教育課程・指導計画（『研究紀要』第30集）		2013
幼小一貫教育において生活と学習をつなぎ、同年齢や異年齢で協働的に探究を深め、多様な能力や個性的な才能を引き出す「生活学習力」を育成する教育課程の研究開発 文部科学省研究開発学校研究開発実施報告書（平成27年度第1年次）／（平成28年度第2年次）／（平成29年度第3年次）／（平成30年度第4年次）		2016・17・18・19

第5巻 成城学園・玉川学園・和光学園 太田 素子 編		
成城学園		
柴田勝「成城小学校経営方針（一）」『近代教育』第1号	成城教育研究所 編、成城書房 発行	1949.12.
柴田勝「成城小学校経営方針（二）」『近代教育』第2号		1950.2.
堀川掬「学習法の歴史的発展（一）」／柴田勝「低学年自学学習の実験」／馬場正男「一年生の教室 国語教育を中心にして」／原川武雄「低学年の算数指導」／山田一枝「低学年理科指導の実際」／藤原芳春「『らくがき』の学習 低学年 絵画教育」／佐藤瑞彦・滑川道夫・濱野重郎・堀川掬・柴田勝「座談会 新教育の方向」（『教育改造』第5号）	成城教育研究所	1946.11.
辰野隆「要領を掴む」／柴田勝「学校生活とその教育 1年生の生活指導」／白井禄郎「新一年教育の課題と構想」／柏熊俊司「湖畔の騒音 話し方訓練の機会」／馬場正男「文字教育（国語）」／山田一枝「一年生の散歩」／原川武雄「算数指導の始期について」／菊池喜栄治「遊びの指導 プランコの交代をめぐる」（『教育改造』第9号）		1947.7.
田沢与光「『自由遊び』の思想と三段階説」（『教育改造』第22号）	成城学園初等学校	1967.2.
及川徳弥「校外教育の意義とプラン」／加藤和信「児童でもできる研究旅行」（『教育改造』第31号）		1970.12.
赤坂包夫「『遊び科』特設の意義」／横山泰三「子どもの成長と遊び」／及川徳弥・矢崎昭盛「環境と子どもの遊び」（『教育改造』第33号）		1971.4.
及川徳弥「社会科の授業にみる低学年の子どもの論理」／横山昭作「文学科と子どもの論理」／赤坂包夫・及川徳弥・大森哲夫ほか「座談会 子どもの論理」（『教育改造』第36号）		1971.10.
赤坂包夫「低学年児童をどうとらえるか」／田沢与光「入学当初の教育計画 三つのプロセスを通して正規の学習へ」／斎藤幹夫「低学年のカリキュラム」／上廻昭「本校創立期における低学年教育の研究」（『教育改造』第39号）		1972.4.
成城幼稚園「幼稚園のカリキュラム」／赤坂包夫「成城小学校カリキュラムの特色（初等学校のカリキュラム1）」／上廻昭「カリキュラム研究の現状（初等学校のカリキュラム3）」／石井宗吾「佐藤三郎氏の講演『能力の今日的問題点 知的能力をどう考えるか』を聞いて」（『成城教育』第13号）	成城教育研究会	1972.3.
成城幼稚園・初等学校「座談会 幼稚園の新しい動き」『成城教育』第17号	成城学園	1976.5.
横山昭作「第八回 初・中・高合同研究会に寄せて」／及川徳弥「一貫性追求の場としての『合同研究会』初・中・高合同研究会の総括的報告」（『成城教育』第29号）	成城学園教育研究所	1980.9.
加藤順子「『成城教育』28・29号を読んで 国語教育のまえに」『成城教育』第30号		1980.12.
「第31回研究集会 異年齢（異学年）交流 学園全体の現状把握と交流体系構築へ向けて」『成城教育』第147号【抄】		2010.3.
「第37回幼・初・中高合同研究会 幼稚園、初等学校のカリキュラムを知る 中学校・高等学校とのよりよいつながりをめざして」『成城教育』第150号【抄】		2010.12.

